

5. JMSJ活動報告

JMSJ(the Journal of the Mathematical Society of Japan)は3ヶ月に一度会員に送付されている日本数学会の欧文機関誌です。その刊行の目的と意義は日本数学会の歴代理事長が科研費申請書で次のように掲げています。

「日本数学会がオリジナリティーの高い高水準の欧文論文を掲載した雑誌を刊行することにより、日本はもとより、世界の数学の発展に資すること」であり、「日本数学会の国際的な活動を支える一つの重要な柱となっている」、「例えば、1948年の本誌の第1巻第1号に掲載された吉田耕作先生の論文は、20世紀の最も輝かしい解析学の成果の一つである」と。

2002年7月に私がJMSJの編集委員長の任を受けましたとき、ジャーナルの世界でも急激に加速するグローバリゼーションの中で、数学の欧文雑誌の国際的競争もたいへん厳しく、またジャーナルを取り巻く環境も急速に変わりつつあり、日本発の雑誌の空洞化が懸念され始めていたときでした。

伝統あるJMSJでも海外の図書館が購読を続けてくれるような魅力ある論文をコンスタントに載せようとするならば、過去の伝統に安穩としてはおられず、これまでの良い面は残しつつも、編集体制は建て直し、とっておきの論文をJMSJに投稿したくなるような環境にしなければならないと思いました。それは何か奇抜なことをはじめる必要性を感じたというわけではなく、例えば内外を問わず良いジャーナルならば当然のようにやっていることは、JMSJの編集部でも、空気の様に当たり前のこととして習慣づけなければいけないと思ったのです。

この2年間でJMSJの編集委員会では、どのように改善に取り組んできたか、以下でご報告致します。

(1) 2年間の推移

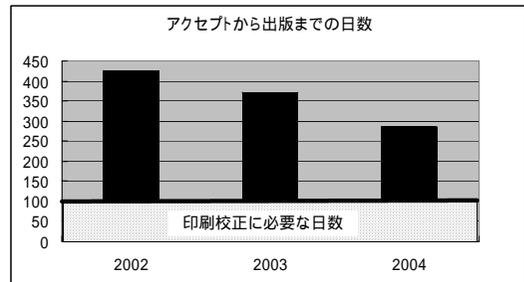
ジャーナルのページ増

理事会の承認を得て当面は年間総ページ数を増やし、またタイプエリアの面積も増

やした(多すぎるマージンを減らした)。この結果、2001年度にくらべて、約40%多くの論文を年間に出版できるようになり、懸案のバックログをかなり減少させることができた。

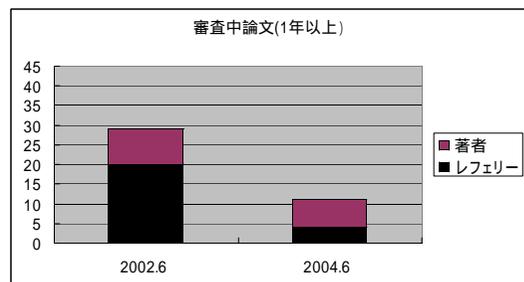
アクセプト後の待ち時間の半減

2004年6月の編集委員会でアクセプトされた論文の約半数は7ヵ月後(2005年1月号)に出版される見込み。2年前の統計と比較すると、2002年の同時期にアクセプトされた論文のうち、約半数が13ヵ月後、残りの約半数が16ヵ月後に出版されており、アクセプトされてからの待ち時間はほぼ半減した。



審査が遅れている論文の数

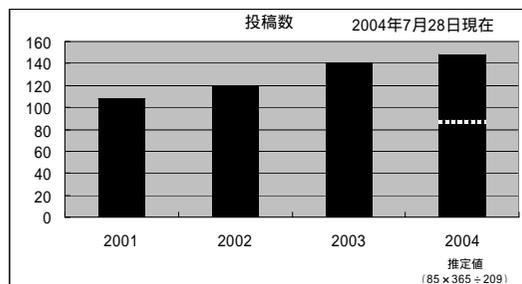
投稿してから1年以上かかっている論文の数は2年前に較べて約3分の1になり、大幅に改善された。特に、著者の手元にあるものを除いてレフェリー中のものだけ比較すると5分の1になり、大いに改善されている。



投稿数の増加

長期的には微減傾向にあったが、最近2年間で、投稿数(新規)が約30%増加し、過去の最高水準に戻りつつある。海外から

の高水準の投稿の増加が目立つ。



海外著者の増加

過去2年間に掲載された論文の海外著者の延べ人数：

23人(2002年度) 40人(2004年度)
とほぼ倍増している。

海外レフェリー数

過去2年間に依頼した海外レフェリー数は約30%増加している。また、いくつかの論文に対しては、細部にわたる通常の査読だけでなく、平行して、その分野の碩学に当該論文の全般的な印象を聞くという査読も機会に応じて依頼を行った。

編集作業における電子メールの使用

海外の雑誌編集部では近年日常的に使われている電子メールによる対応が、2002年7月の時点のジャーナル編集部ではまだ皆無に近かった。日本数学会の事務局としても、欧文ジャーナルの編集能力のノウハウを維持し、時代に合わせて向上させる必要があり、またジャーナル運営上、特に海外のレフェリーや投稿者ときめ細かく素早い対応を取らなければならないので、電子メールを編集で積極的に使う方向で、数学会の事務局に態勢を切り替えていただくことにした。

そこで日本数学会事務局のJMSJ担当の市来陽子さんには、通常の事務を全部これまで以上にきちんとこなしてもらいながら、「和文・英文メールを書く 編集委員長に送る 添削をうけて直す 学ぶ」を個別のケースごとに繰り返してもらった。JMSJではジャーナルの編集のために交わす手紙・メール・Faxはすべて中央管理していること

もあり、この2年間だけで国内外合わせて1万通を超える。

これほどの量をこなしながら新しいノウハウも次々に吸収された市来さんに感謝し、今後もこの調子で更なるレベルアップを目指していただきたい。

インパクトファクター

2004年6月発表のISIのデータによると、この2年間では次のように推移している。(0.347 0.372 0.435)

科研費

JMSJは毎年、科研費を申請している。今年度は740万円の援助を受けることになった。

On Line 化

いくつかの会合などを通して情報収集には努めたが、JMSJの特徴を生かしながら変革するには複合的な問題があり、この2年の間には実質的な進展はできなかった。

ホームページ

今年度5月にJMSJのホームページを開設した。アドレスは

<http://www.kurims.kyoto-u.ac.jp/~jmsj/JMSJ.htm>

で、日本数学会のホームページからリンクをたどって見ることもできる。

酒井文雄氏が編集委員長のときに作られた1巻～50巻までの著者とタイトルのデータベースを、事務局の市来さんが中心となって点検作業をした上で、htmlファイル化し、その後の巻も合わせて全巻の目次をインターネットで見ることが可能になった。

(II) Journal 編集委員について

JMSJの編集委員長は、創刊当時から16年間は複数の数学者による責任体制でしたが、近年はずっと一人のみでした。しかし最近のジャーナル情勢の急激な変化に対応するため、理事会の承認を経て、この7月から二人制を取ることとし、谷島賢二氏と小林俊行とが2004年度7月から編集委員長の任にあたることになりました。向井茂氏は6月で編集委員の任期を終え、新たに宮地晶彦氏

と齋藤政彦氏が編集委員に加わりました。

(III) 最後に

JMSJではこの2年間で、延べ400人にもものぼる方々にレフェリーのご協力をいただきました。この場をかりて、ご協力くださった皆様に厚くお礼申し上げます。

一方、JMSJにアクセプトされなかった多くの論文の中にも、非常に面白い結果を含んだ論文があったことと思います。そういう論文もいい場所を見つけて発表されてほしいと思います。

評判の良いジャーナルならば、良い論文が多く掲載され、購読する図書館も多く、また一流の数学者がレフェリーに多くの時間をかけてくれ、そういった信頼感がまた投稿者に伝わり、良い論文が多く投稿されてジャーナルの評判が良くなる、という好循環になる傾向があると思います。

逆に、これらがどれもうまく行かずに悪循環のサイクルに陥るということも多々あることでしょう。

良いサイクルを構築するのは難しいことですが、JMSJの編集委員会では、この2年間ジャーナルを良くするために何度もフリーディスカッションを行いました。JMSJの過去の良き伝統に加え、迅速で誠実かつ厳正な審査・判断を行うこと、レフェリーや著者に対して適切な手紙を書くこと、また投稿者やレフェリーに対する事務の対応を素早く的確に行うことなど、少しでも投稿者と読者の信頼を増すための地道な努力をしてきました。

まだまだ至らぬところや失敗が多いですが、徐々に良いサイクルに向かっているとしても、そうした良いサイクルが回った結果を我々が目にすることができるのは、何年か先であり、そのために努力をした編集委員なり事務局担当者が任期を終えた後であるかもしれません。

しかし、それにもかかわらず、冒頭で申し上げましたようなJMSJの目的のために、時間をかけて一所懸命仕事をしてくださった匿名のレフェリーや編集委員ひとりひとり、および市来さんの労をねぎらいたいと

思います。今後も尚一層、多くの良い論文がJMSJに投稿され、JMSJがさらなる躍進をとげていくことを願ってやみません。

(JMSJ編集部 小林俊行記)